

がら北海道の夏を少しは味わっていただけたのではないかと思う。

翌8月7日は釧路湿原を一周するコースでエクスカージョンを行った。案内役は研究会会員でもある釧路市在住の植物研究者、滝田謙氏にお願いした。釧路市内を午前9時に出発し、まず湿原の景観が最も素晴らしいと人気のある、湿原東部のJR細岡駅近くの丘陵地にある通称大展望を訪れ、記念写真を撮った。散策に行っていた数人を取り残したことをこの場をかりてお詫びしておきます。

その後、湿原に戻り、細岡駅のすぐ近くにあるタッコブ沼で水草を観察した。特にここは参加者には珍しい水草だと思われる、ヒンジモが多数生育している所である。皆さん熱心に観察していたので、予定の時間をだいぶオーバーした。すぐに次の観察地塘路湖へと向かった。ここでは特にエゾノミズタデがちょうど開花しており、絶好の被写体となっていた。これも南の方の参加者には馴染みの薄い水草ではなかったのではないかと思う。続いて

シラルトロ湖に行き、多種類の水草を観察した。そして、湖畔で昼食となった。

午後は釧路湿原北部のコッタロ湿原から湿原の景観を楽しみ、湿原の西側に回った。ここでは湿原に流入するいくつかの小川でエゾミクリやオオバイカモを観察した。オオバイカモは最近新たに報告されたものでここで採集されたものがタイプ標本となっているとの説明が角野氏からあった。

エクスカージョンコースも終わりの方となり、環境庁のビジターセンターを訪れ、滝田氏の作製した植物リストを参考にしながら、湿原内に設定された木道を散策した。最後に昨年釧路でおこなわれたラムサール条約締結国会議の直前にできた環境庁のワイルドライフセンターを訪れ職員から解説を聞いた。というわけで無事エクスカージョンも終わり、釧路市内に戻ったのは5時頃であった。当日の夜帰途につく人やもう一泊する人などさまざまであったのでバスを降りた時点でここで解散となった。

(神田 記)

○角野康郎・遊磨正秀共著『ウェットランドの自然』(保育社, 1995年5月, 198p, 2,300円)

自然界が直面するテーマをビジュアルに展開するという保育社のエコロジーガイドシリーズの一冊として出版された本である。見開きのカラーページに見開きの文章が続くという形になっている。

本書のはじめにも書かれているように、「ウェットランド (wetland)」という言葉はあまり聞き慣れない言葉かも知れない。「wetland」は直訳すれば「湿地」となってしまう。しかし、実際にはいわゆる「ラムサール条約」中にある定義のように、「wetland」には、河川や湖沼、あるいは一時的な水溜まりや低潮時における水深が6mを超えない海域など、「湿地」という言葉からはイメージされないさまざまな水域が含まれている。本書の名前に敢えて聞き慣れない「ウェットランド」という言葉を取り入れたのは、これらさまざまな水域の自然を包括的に紹介したいという著者の意図による。

本書は、「日本のウェットランド」、「ウェットランドの環境と自然」、「ウェットランドの危機」、「ウェットランドの現状と保全」という4つの章に大きく分けられる。このうち、本書の中核をなす「ウェットランドの環境と

自然」の章では、河川、水路、湖沼、ため池、水田、湿原、湿地、干潟・塩湿地というさまざまな水域の成因、地形、動植物相などが紹介されている。これに続く「ウェットランドの危機」では、埋め立てられるため池の様子や河川改修の様子、富栄養化によるアオコの大発生、絶滅危惧種など、ウェットランドの憂うべき開発の現状がビジュアルで紹介されている。この章でおわりであれば、ウェットランドに未来は無いと感じてしまうであろうが、最後の「ウェットランドの現状と保全」でこれまでの営みの反省としての保全への取り組みのあり方について若干の紹介がされているのが救いとなっている。

普通このような写真をふんだんに盛り込んだ本は、解説の文章はおうおうにして写真のツマ程度の内容になることが多いのだが、本書は解説ページの内容が充実しており、読みごたえのあるものとなっている。巻末の「ウェットランドの生態」と「人とウェットランドのかかわりの歴史」も興味深い。

限られたページ数の中で、どのような写真を紹介するか、どのような内容を盛り込むかについて、著者らが頭を悩ませたであろうことは想像に難くない。ウェットランドの研究と保全を進めることが急務になっている現在、

広く浅くではあるが、さまざまなウェットランドを通覧することにあてた著者の意図が達成されるよう、一般読者や研究者のみならず、行政関係者にも一読してもらいたい本である。
(國井秀伸)

○会員移動

〈新入会〉

- 小西由希子 263 千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学理学部生物学教室
- 田中 亘 同上
山本いづみ 同上
- 川口吉太郎 300-15 茨城県北相馬郡藤代町
光風台3-10-1
- 関岡 裕明 730 広島市中区江波本町8-5-402
- 片岡 道夫 956 新潟県新津市子成場707
- 白岩 卓巳 657 神戸市灘区鶴甲4-7-21-507
- 長崎 摂 662 兵庫県西宮市苦楽園一番町3-4
- 石川 靖 060 札幌市北区北19条西12丁目
北海道環境科学センター
- 森 由紀 907 沖縄県石垣市字登野城1184-6
新城アパート201
- 広永 勇三 165 東京都中野区大和町1-65-2
富士ハイツ202
- 新日本気象海洋(株)生態解析部(大庭)
158 東京都世田谷区玉川3-14-5
- 伊豆 守彦 288 千葉県銚子市諸持町496-114
- 横林 庸介 260 千葉市中央区春日1-17-11-103

〈住所変更〉

- 野崎 久義 113 東京都文京区本郷7丁目3-1
東京大学大学院理学研究科生物科学専攻(植物)
- 辻 誠一郎 285 千葉県佐倉市城内町117
国立歴史民俗博物館
- 日野 修次 990 山形市小白川町1-4-12
山形大学理学部物質生命化学科
- 原口 昭 096 北海道名寄市徳田
北海道大学雨竜地方演習林
- 鈴木 聖子 184 東京都小金井市貫井南町4-14-7
第1みゆき荘G号室
- 菊部 治紀 250 神奈川県小田原市栢山3573-142

- 橋本 卓三 729-31 広島県芦品郡新市町戸手
745-1-A102
- 佐々木俊子 541 大阪市中央区淡路町1-5-10
G. S. ハイム船場409
- 石川 啓吾 181 東京都三鷹市下連雀2-7-23
メゾンあからぎ101
- 木村 保夫 480-01 愛知県丹羽郡大口町余野
若ヶ橋190 スプリングハイツ1, 4A

〈退会〉

- 岡田斉之(群馬), 大石泰輔(香川), 中沢信午(京都)
和田政明(神奈川)

訃報 本会会員浜田善利氏は、本年4月にお亡くなりになりました。慎んで御冥福をお祈り致します。

浜田善利先生の急逝を悼む

大 滝 末 男

本会が同好会とよぶ創立当時(会員約130名)からの会員で、熊本工業大学教授、薬学博士の浜田善利先生(1933~1995)は、水草類にも造詣が深い先生であった。私は彼と2か月前に、阿蘇の温泉で2泊し、江津湖の湖岸などで水草を調査した。彼はいままで無病息災頗る元気の由で、くまもと『野の花』(1994年)・『くまもとの薬草』(1993年)その他の著書が多数あり、大活躍中であった。ところが5月1日ご子息様から、父が4月28日にクモ膜下出血で突然他界した報を受け、私は呆然自失・悲憤の限り、本会の大損失となった。それに比べ私は70歳後半に入ること考えると、61歳の他界は無念残念でならない。嗚・呼! 人生はなんと無常なのである。… 南無阿弥陀仏 … 合掌。

1995年5月2日記